

題名：もう少し大らかになって、韓国語も「世界語」に。

強豪、大阪朝鮮高等学校ラグビー部を追ったドキュメンタリー映画、『60万回のトライ』を観てきました。社会的問題を扱いながらも暗く重い要素を感じさせず、スポーツマン精神に溢れた若者たちの、爽やかな笑顔と力強いスクラム、タックルが感動的な映画でした。

朝鮮学校については映画の中で語り手さんが語ってくれますが、第二次世界大戦後、朝鮮半島に帰国しなかった人たちが民族教育を受けるために設立された学校です。いまでも幼稚園から大学までがあり、当校にも「高校卒業まで朝鮮学校でした」「朝鮮大学校まで進みました」という方が韓国語を、多くは通訳や翻訳を学びにいらっしゃいます。

皆さんに共通して言えるのは、語彙の豊富さと流ちょうさ。日本語ネイティブではなかなか身につかない高級語彙をサラリと使いこなします。話すスピードも速く、羨ましい限りです。

しかし一方で、イントネーションや独特の語彙などにコンプレックスを持つ人も多く、「直したい」と口々におっしゃいます。どうも、韓国出身の、韓国語ネイティブの人々に指摘され、気にしてしまうようです。

話は変わりますが、当校が約4年前に中国語講座をスタートさせたときの説明会で、「通訳案内士道場」を運営し、韓国語と中国語の通訳案内士の資格を持つ高田直志先生に「韓国語から中国語への招待状」というテーマで基調講演をしていただきました。そのときのお話で非常に印象に残っているのが、「中国語は、英語のような世界語です」というお話。

中国は広く、55あまりの民族の集合体。民族によっては固有の言語があり、それ以外に共通語として使うのが中国語なので、例えば高田先生が中国で中国語を話すと、「外国人だろう」とならず、どこか別の地方の人なのだろうと認識される程度なのだとか。

私はその話を聞いて、「なるほど、それは居心地がいい。すぐに‘外国人だろう。どこから来たんだ。イントネーションで（発音で）すぐ分かる’となる韓国、韓国語とは大きな違いだな」と思いました。

もう一つ。以前出場した「世界韓国語雄弁大会」で少し残念に思う経験をしました。中国の吉林省、延辺（北朝鮮との国境に近い中国の、朝鮮民族の人々が暮らす地域。）から出場した発表者のことを、審査委員長さんが講評の際に「この大会は韓国の大会。北朝鮮の言葉は使わないで下さい」とおっしゃったのです。彼女の発表は生き生きとしていて、表情

も豊かでとても印象的だったので、驚きました。彼女のその後の残念そうな暗い表情は痛々しかったです。

以前、私は第二回のコラムで、「通訳を目指すなら、発音は良くないといけない」と書きました。確かに、テレビから流れる通訳者の日本語がバリバリの方言だったりしたらそれはそれで衝撃的なので（笑）それとは別の話として、日本で暮らす朝鮮学校の人々が話すことば、中国の吉林省の人々が話すことばも韓国語（朝鮮語）。せっかく「世界語」になり得る要素を持つのですから、もっと大らかになれないかなあ、と思ったりもするのです。

「方言というレベルを超えた、地域独特の語彙、イントネーションがある」というのは、一時期の移民制度などを除けば、島国ではば散らばる必要性がなかった日本、日本語にはないことです。韓国語を愛する人間として、韓国出身の韓国語ネイティブの人たちをお願いしたいのは、すぐに「ソウルの標準語でない、おかしい！」となってしまうのではなく、あれも、これも、私たちの誇らしい言語、と大らかに捉えてほしいということ。

標準語は守りつつ、通訳者の発音・イントネーションも守られつつ（笑）、その他 7,700 万人といわれる朝鮮語人口（東京外国語大学の調査ページ「朝鮮語を知る～総論」<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/choes/bibimbab/siru/siru01.html>）の人々が話すことばに対しては、「世界語」に近い許容性があるといいな、と思っています。